

伝統工芸品研究のレビュー —研究の意義をめぐる試論— The significance of the research for traditional crafts

前川洋平^{*1}・宮林茂幸^{*1}・関岡東生^{*1}

Youhei Maekawa^{*1}, Shigeyuki Miyabayashi^{*1} and Haruo Sekioka^{*1}

* 1 東京農業大学地域環境科学部

Faculty of Regional Environmental Science, Tokyo University of Agric., Setagaya-ku, Tokyo 156-8502

要旨：わが国における伝統工芸産業の多くは、農山村をはじめとする、地域の産業の一つとして成立してきた。今日では、種々の公的支援が講じられつつあるにも関わらず、これらの生産活動の多くは、わが国がこれまで歩んできた経済発展の中で衰退傾向にある。こうした現状下にあって、伝統工芸品・伝統工芸産業の衰退の傾向に歯止めをかけ、地域の産業として、再生し後世に伝えてゆくためには、伝統工芸品あるいは伝統工芸産業の社会的な意義を再確認・再構築する必要があると考えた。具体的には、まず用語としての「伝統工芸品」の含意するところを整理し、次いで先行研究等より、伝統工芸品の重要性・必要性に関する記述を整理分析した。さらにこれらを通じて、伝統工芸品研究の今日的意味とその成果の応用の可能性について考察を行った。伝統工芸品研究の意義は、森林や林業、林産業や山村を中心的な対象とする林学分野において、伝統工芸品産業の発展形態を再認識し、そのもつ意義や、新たな研究視点、歴史的記録の有用性等を融合あるいは関連付けることで、林学研究を一段と進め、林業や山村の社会的な位置づけを多様な意義を有するものへと発展させると考えられる。

キーワード：伝統工芸品、地場産業研究、林学研究

Abstract : Many traditional craft industries have come into existence as the regional industry in rural areas. Today, most of these production activities tend to decline gradually amid the economic progress of our country in spite of various kinds of public support. Under this situation, we considered it necessary to reconfirm and reconstruct the social significance of traditional crafts and its industries in order to put the brake on this declining tendency, and hand down to posterity. Concretely, first of all, we defined its own meaning of the ‘traditional craft’ as a term in Japanese, and then sorted out and analyzed description in previous studies concerned with importance and necessity of the traditional craft. In addition, we also considered the relevant meaning of research for traditional crafts and applicability of the result come out of this study. The significance of the research for traditional crafts is to recognize the process of traditional industries’ development. And to unite or relate with its significance, the new viewpoint of research and the values of historical record makes further progress in forestry research and develops the social position of forestry and rural area into the existence with diverse meaning.

Keywords : Traditional craft, Local industry research, Forestry Research

I はじめに

わが国における伝統的な材料や技術を用いた生産を行う産業（伝統工芸産業）の多くは、農山村をはじめとする、地域の産業の一つとして成立してきた。今日では、種々の公的支援が講じられつつあるにも関わらず、これらの生産活動は、わが国がこれまで歩んできた経済発展の中で衰退傾向にある。

こうした現状下にあって、伝統工芸品・伝統工芸産業の衰退の傾向に歯止めをかけ、後世に伝えてゆくためには、伝統工芸品あるいは伝統工芸産業の社会的な意義を再確認・再構築する必要があると考えた。具体的には、まず用

語としての「伝統工芸品」自体の含意するところを整理し、次いで先行研究等より、伝統工芸品の重要性・必要性に関する記述を整理分析した。さらにこれらを通じて、伝統工芸品研究の今日的意味とその成果の応用の可能性について考察を行った。

調査は、伝統工芸品を対象とした先行研究の整理および分析を行った。具体的には、国立情報学研究所が運営する学術情報データベース CiNii を用いて論文を抽出した。なお、検索用語は「伝統的工芸品」および「伝統工芸品」とした。また、先行研究の整理および分析を補足するものとして、森林・林業・民俗学・経済地理学をキーワードに關

連文献を検索したほか、伝統や工芸等の関連用語の確認を行った。

表-1. 先行研究の整理概要

Table 1 The summary of the previous studies

調査名	先行研究の整理	
検索対象	CiNii (注)	
検索方法	論文検索	
検索キーワード	伝統的工芸品	伝統工芸品
検索結果	206 件	79 件
本研究での対象	51 件	20 件
最終確認日	2014年10月2日	2014年10月2日
備考	CiNii上で本文にアクセス可能なものを抽出	

注：国立情報学研究所が運営する学術文献データベース

II 伝統工芸品とは何か

本章では、伝統工芸品とは何かを整理し、行政機関による伝統工芸品の定義との相違を検討したい。

1. 伝統工芸品の性質

まずは、「伝統工芸品」という用語からその性質を概観したい（図-1）。

伝統工芸品は、「伝統」と「工芸」、「品」の三つの用語から構成された複合語である。「伝統」は「歴史性」を示し、「工芸」は「実用性」を意味する。そして、「品（ひん）」は文字通り、品（しな）であり、「それぞれを兼ね備える有形物（加工物）」である。

さらに、これら歴史性と実用性からは、多くの場合、「地域性」が直截に導かれ、またさらに、そこからは、地域資源を有効活用する「合自然性」が示唆される。

これらを踏まえ、以下、本稿における伝統工芸品とは、歴史性・実用性・地域性・合自然性を兼ね備える有形物（加工物）と定義することとする。

なお、実用性には柳が提唱した、「美は用の現われであり、用と美は結ばれる」（13）という「用の美」の重要性を援用し、ここでは装飾性（美的価値）を含む概念として捉えた。

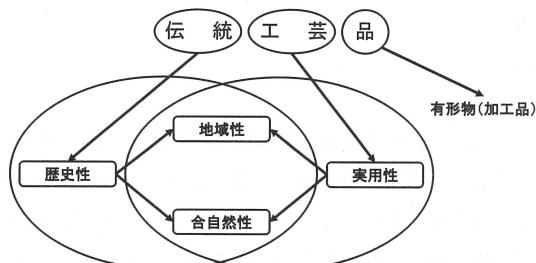


図-1. 伝統工芸品の性質

Fig.1 The character of traditional crafts

2. 行政機関による伝統工芸品の定義

次に、国による伝統工芸品の定義を確認し、先に整理した伝統工芸品の性質との相違を確認したい（図-2）。なお、ここでは、国の用いる「伝統的工芸品」を本稿でいう「伝統工芸品」と

等置して以下の論を進めることとする。

国は、1974年に「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」を制定・施行し、同法に基づき、経済産業大臣は「伝統的工芸品」に指定することになる。指定を受けるには五つの要件に応えることが必要となる。一つ目は、主として日常生活の用に供されるものとされ、実用性のほかに各地域の適正に合わせた生産を行うという観点で地域性も該当する。二つ目は、製造過程の主要部分が手工業的であることとされている。これは手工業性が考えられるが、法が設ける限定条件ともいえるので、以下の考察からは除外したい。三つ目は、伝統的な技術又は技法により製造されることとされている。これは、運用上100年以上と規定されており、歴史性が該当する。四つ目は、原材料に関することで、主たる原材料が伝統的に使用されていることから合自然性が該当すること、これも先ほど同様に、運用上100年以上と規定されていることから歴史性が該当する。五つ目は、产地形成に関することで、一定の地域内に产地として成立することであり、地域性が該当する。

このように、国による伝統工芸品の定義は、先に整理した用語「伝統工芸品」の四つの性質におおよそ合致しているといえる。さらに、前川らの調査によって、都道府県による伝統工芸品の定義も国を追従する傾向にあることが明らかとなっている（6）。したがって、行政機関による伝統工芸品の定義はこれら四つの性質にほぼ合致しているといえる。

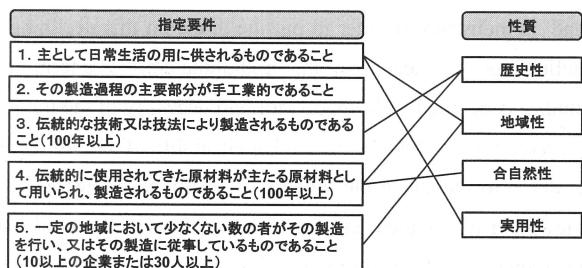


図-2. 伝統工芸品の性質と国による伝統工芸品の定義の関連性

Fig.2 The relation between the character of traditional crafts and the definition of traditional crafts by the government

III 伝統工芸品に関する記述

ここでは、先行研究から伝統工芸品に関する記述を整理したい。なお、紙幅の都合上、若干の例示に留める。

一つ目は、北出（2）によるもので、「伝統工芸品は長い年月の間に、天然資源の恵みの中で、日本の生活文化を育み、地域経済の搖籃としての役割を果たしてきた」と評価している。この一文には、「長い年月の間」からは歴史

性が、「地域経済の搖籃として」からは地域性が、「天然資源の恵みの中で」からは合自然性が、「日本の生活文化を育み」からは実用性が該当すると考えられ、四つの性質すべてが含まれているといえる。

二つ目は荻野（8）によるもので、「昔から風土の中で自然観や歴史観をベースに、自然と共生しながら資源循環という原理にもとづいて作られ、使われてきた伝統工芸品」と位置づけている。この一文にも、「昔から」という記述からは歴史性が、「風土の中で」という記述からは合自然性が、「使われてきた」という記述からは実用性が含まれている。また、「伝統工芸品は、地域資源を活用しながら、生活環境の質を高めることを可能にする」としており、ここにも合自然性・実用性が含まれている。

三つ目に、黒川（4）は、伝統工芸が地域社会に与えるインパクトとして10項目を挙げている。その中にも、生活に関する事から実用性が、地域の風土に関する事から合自然性が、地域との関連から地域性が含まれている。

四つ目に、石井（1）によるものでは、「伝統的工芸産業は地域に歴史的、文化的背景を持つ代表的な地場産業の一つ」としており、伝統工芸品産業が地域経済との関わりをもっていること、さらには、地域経済のみならず、地域住民の日常生活ともつながりがあるとしており、こちらにも地域性・歴史性・実用性が含まれていることがわかる。

ここまで伝統工芸品に関する先行研究の記述を分析したが、先行研究においても伝統工芸品の特徴としているのは、おおよそ先に位置づけた四つの性質を含んでいることが確認された。

IV 伝統工芸品研究の応用の可能性

ここでは、伝統工芸品研究の応用の可能性を検討したい。発表されている学問分野から整理すると、産業史研究、郷土史研究、地場産業研究の三つの分野が挙げられた（図-3）。

これらの分野は、林業や農山村等の林学の研究対象と共通するところが多いにも関わらず、林学研究においては伝統工芸品に注目された研究は確認することができなかつた。したがって、林学研究からも、伝統工芸品にアプローチする必要があると考えられる。

そこで、林学分野からのアプローチを進めるためには、参考分野の研究視点を整理する必要がある。研究視点を整理する上で、産業史研究や郷土史研究は地場産業研究との接点が多いことから、以降は、伝統工芸品に対する地場産業研究のアプローチの視点を整理したい（注1）。

そこで、地場産業研究の視点を伝統工芸品の性質と関連させて整理したい。

一つ目は、上野（12）による地場産業の位置づけであり、「地場産業は、地域の資源と技術・文化を基盤に成立した産業」としている。また、「地場産業は資本の地域内蓄積・循環、就業機会の提供、地域資源の活用、日用消費財市場の形成を通して地域経済や国民経済を底辺から支えてきた」としている。この位置づけには「地域」・「資源」・「文化」・「日用消費財」という単語が含まれており、それぞれ、地域性・合自然性・歴史性・実用性の四つの性質が含まれていることがわかる。

二つ目は、塚本（11）による位置づけであり、「地場産業は、地域の社会や文化、風土と密接に結びついており、きわめて強い伝統的性格をもつ」としている。ここにも、地域性・歴史性・合自然性が含まれている。

三つ目は高柳（10）によるものであり、「地場産業は地域社会におけるアイデンティティ形成の特徴をもつ」としており、地域性を強調していることがわかる。

四つ目は、森戸（3）によるもので、「地場産業は地域における幅広い雇用効果、人的資源や文化的歴史的蓄積といった地元の資源の地域固有の活用の仕方があり、地域振興の先導的な役割を担う」としている。ここには、地域性と歴史性が含まれていることがわかる。また、地場産業の地域における役割として、「各種の技術や技能の蓄積によって、質の高い製品が生産できること、地域固有の広義の生活文化を形成できること」としており、歴史性や実用性が含まれている。

五つ目は、下平尾（9）によるもので、「地場産業は地域的な関連性が大きく、経済的な面のみならず、教育、地域文化、まちづくりの面において一定の役割を果たしている」としている。ここにも歴史性や地域性が挙げられている。

以上のように、伝統工芸品研究および伝統工芸品産業研究は、地域資源を有効に活用した地場社会の発展につながるものであり、地域経済研究として応用できる可能性があるといえる。

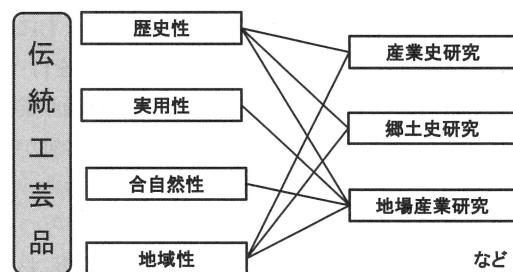


図-3. 伝統工芸品研究の応用

Fig.3 Related research fields of traditional crafts

V 伝統工芸品研究の意義

本稿では伝統工芸品を、用語の意味から歴史性・地域性・合自然性・実用性を兼ね備えた有形物と位置づけた。そのうえで、伝統工芸品研究が、伝統工芸品に係わる技術の継承や保存に留まるものではなく、地場産業研究など複数の分野からアプローチされてきたことを明らかにした。地場産業研究は、林業や農山村といった林学の研究対象とするものとの接点も多く、林学分野からの伝統工芸品へのアプローチが望まれる。

伝統工芸品研究に加え、地場産業研究および林学研究の視点を合わせることによって、山村文化研究や山村・林業経済研究、山村・林業史研究、二次的自然環境の保全に寄与する研究等への成果の還元・応用が可能であろう。さらに、これら研究を進めることで、農山村振興や農林業や、その他関連業を含めた産業の振興、すべての人の Quality of Life (QOL) の向上などといった点で貢献できると考えられる。

伝統工芸品研究の意義は、森林や林業、林産業や山村を中心的な対象とする林学分野において、伝統工芸品の発展形態を再認識し、そのもつ意義や、新たな研究視点、歴史的記録の有用性等を融合あるいは関連付けることで、林学研究を一段と進め、林業や山村の社会的な位置づけを多様な意義を有するものへと発展させると考えられよう（注2）。

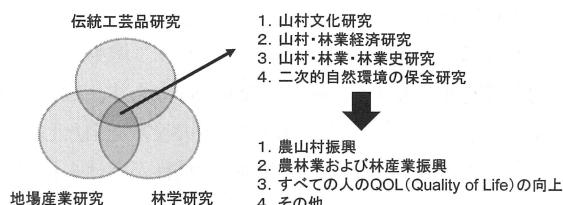


図-4. 伝統工芸品研究の展開の可能性

Fig.4 Possible development of research for traditional crafts

VI おわりに

本稿では、伝統工芸品の性質を位置づけるとともに、行政機関による伝統工芸品の定義との相違の確認を行った。また、先行研究の整理から伝統工芸品研究は地場産業研究の視点からは蓄積がなされているものの、林学分野からの研究蓄積はなされていないことを明らかにしてきた。したがって今後は林学分野の視点から伝統工芸品をみつめていくことが必要になる。伝統工芸品は農山村地域における産業として位置づけられるとともに、一連の木材生産活動を考えた場合、利用段階において伝統工芸品産業は大きなマーケットを構築していることも考えられる。今後はこれ

らの視点を踏まえ、伝統工芸品を農山村の振興ツールとしても検討していきたい。

注記

(1) 一方、純粹な地場産業研究の視点とはいえないものの、デザイン学研究の視点からも伝統工芸品を対象とする研究が散見された。中でも地場産業研究の視点に近い論考がいくつか確認された。本稿では、詳細に取り上げないが、デザイン学研究の視点からも、伝統工芸品に着目していることは確認しておきたい。

(2) 香坂らや、前田らは農林水産業における知的財産の活用について議論をしている（7）。それによると、現状では、地域団体商標や地理的表示において林業に特化した項目が少ないとしている。その意味でも、知的財産と林業を結びつけるものとして、伝統工芸の研究の意義が深いことを申し添えたい。

参考・引用文献

- (1) 石井廣志（1989）伝統工芸復興と産業発展の可能性への提言—伝統工芸と産業振興・沖縄の試みー. 東京家政学院大学紀要 **29** : 95-117
- (2) 北出芳久（2013）大阪の伝統的工芸品産業の現状と課題. 産開研論集 **25** : 51-64
- (3) 清成忠夫・森戸哲編（1980）地域社会と地場産業, 日本経済論評社, 東京 : 265 pp
- (4) 黒川威人（1987）伝統産業におけるデザイン研究2 その活性化にむけて—現状と方針ー. 学報 **31** : 31-40
- (5) 町田俊一（2001）伝統的工芸品産業におけるデザインの役割. デザイン学研究特集号 **8** (2) : 1
- (6) 前川洋平・宮林茂幸・関岡東生（2014）伝統的工芸品産業に関する都道府県条例整備の現状. 林業経済 **67**(6) : 19-28
- (7) 日本知財学会知財学ゼミナール編（2014）知的財産イノベーション研究の展望, 白桃書房, 東京 : 408pp
- (8) 萩野克彦（2001）「伝統的工芸品」の今日的意味. デザイン学研究特集号 **8** (2) : 10-17
- (9) 下平尾勲（1985）現代地場産業論. 新評論, 東京 : 545 pp
- (10) 高柳長直（2003）景気低迷期における地場産業の产地構造—秋田県角館における樺細工産業の事例ー. 農村研究 **97** : 43-54
- (11) 塚本成美（1997）木材産業の近代化と伝統的社会関係. 城西大学経済経営紀要 **15**(1) : 87-113
- (12) 上野和彦（2007）地場産業産地の革新. 古今書院, 東京 : 114 pp
- (13) 柳宗悦（1984）民藝四十年. 岩波書店, 東京 : 406pp